

信毎俳壇

神野 紗希 選

はつもみじあきりのなかにしろいかに

(中野市) 風間 一乃

草の乳指に纏はる残暑かな

(長野市) 萩原 宏祐

海の出産陸の出産や月光

(長野市) 武田 芳子

遺影をばタオルで拭い終戦日

(中野市) 田川 寿男

流れゆく雲の早さよ今朝の秋

(佐久市) 栗林 貞夫

キャンプ初日や幽霊は幽霊語

(塩尻市) 神戸 千寛

ミント飴嚙む夜字子や微分法

(小諸市) 加藤 陽介

深閑として微風あり老いの秋

(小海町) 依田 久代

この月や廃虚のガサを見詰む

(松本市) 小林 幸平

スーパーにバジャマの父娘十日月

(諏訪市) 関 克徳

佳作

かなかなや介護施設の母の声

(飯綱町) 寺島 渉

雑草という草はなき敗戦日

(駒ヶ根市) 小木曾文彦

選評

一句目、汁物の浅淵の中に小さな蟹が。白さに着目したことで命の儚さがしみじみと迫る。初紅葉のほのかな華やぎも、過ぎ去る時を意識させて。二句目、草を摘むと白い乳状の液が。指に粘る感触に、

秋も纏わる暑さが重なる。三句目、海で生まれる命、陸で生まれる命。出産の大事を月光があまねく包む。四句目、「写真でしか知らぬ、長押の父の遺影」と添え書き。戦後80年の夏も、父を思う。

坊城 俊樹 選

立秋や母逝きし日の化粧台

(長野市) 横沢 ナナ

似顔絵に添へ文ありて夏休み

(須坂市) 富田 孝弘

焼夷弾落ち来し彼の日赤とんぼ

(坂城町) 柄沢 満則

秋暮しハーベルを持つ我優顔

(長野市) 田中 重実

夜濯の母は肘まで濡らしめて

(佐久市) 吉岡 徹

補聴器の拾ふ声養虫の声

(安曇野市) 丸山 進也

帰省子や犬を存分抱きしめて

(大町市) 丸山めぐみ

赤とんぼ少年たちの立てる指

(佐久市) 西田 和彦

輪踊りの二重になりて君もあは

(飯綱町) 小林 紀子

天と地の間で遊ぶ夏燕

(辰野町) 増沢 簗山

佳作

磯の香の残暑の町の真昼かな

(佐久市) 佐藤 勝子

次々とランナー抜かず夕立かな

(長野市) 宮沢 朝子

選評

一句目、秋立つ日、娘はじっと遺品である母の化粧台を眺める。そこには亡くなった日の母の面影がよぎる。この句は娘でしか作れない唯一無二のもの。二句目、子供が描いたお父さんお母さんの似

顔絵。夏休みの宿題の計画か何かも、書かれているのか。この絵は永遠の宝物。三句目、あの空襲による焼夷弾の光景は今でも忘れられないもの。今この平和な空にまた赤とんぼが浮かんでも。

今井 聖 選

〇脚で農夫真向ふ稲穂波

(飯田市) 吉沢 奨

夕顔の蔓を辿りて逝きにけり

(愛知県大山市) 紅紫あやめ

日焼して尻の白さを競ひ合ふ

(辰野町) 矢島あさ子

蠅一匹病妻を愚弄す一週間

(松本市) 小林 幸平

水澄みてまた底石と対面す

(箕輪町) 向山 政俊

口をあけ冷ますたこやき夏祭

(上田市) 竹内 重美

秋めくや佐久の小鮒を煮る句ひ

(佐久市) 佐藤 勝子

竹馬が杖に替はりて敬老日

(中野市) 芳川 菊水

父の忌に薬屋の団扇出しにけり

(大町市) 丸山めぐみ

立秋やアイアンの先青蜥蜴

(大町市) 原田 勝

佳作

連日の暑さうんざり余命生く

(飯綱町) 小林 紀子

波際の瓶にハングル秋の風

(小海町) 井上 英一

選評

一句目、土に生き土と格闘してきた農夫の〇脚は戦傷のようなもの。農夫はさらに稲穂の波に立ち向かう。生きるために。二句目、死者が夕顔の蔓に沿って天に昇った。これは追悼の句である。三句

目、まさに背中と尻の境目にみられる日焼けの白と黒の対照はみな体験するところであろう。実に健康的。四句目、病床にある妻が同じ1匹の蠅に悩まされてきた。なんと1週間も。憎き奴。